十勝毎日新聞
発行所
十勝毎日新聞社
〒080 帯広市東1条南8丁目
電話＝編集㊂2121、広告㊂2323、総務・販売㊂2222
©十勝毎日新聞社 1992

宇宙開発最前線

☆☆4☆☆

角田ロケット開発センター

豊かな自然とも共存

東北の宇宙拠点

81㌶の敷地に各設備

宮城県南部の角田市。人口約三万五千人。周辺は水田、養蚕地帯、タバコの栽培地に囲まれている。

市北側の豊かな自然が残る江陵地帯に、科学技術庁航空宇宙技術研究所と並んで、宇宙開発事業団角田ロケット開発センターがある。

管理棟に入ると、種子島宇宙センターから発射するH2ロケットの動く模型や人工衛星などの展示物が目につく。

江口巧一主査の案内で、約八十一㌶の敷地に点在する高空燃焼試験設備、供給系試験設備、タンク熱特性試験設備などを見学した。

上空三十㌔の環境を模擬し、第二段エンジンの試験をする高空燃焼試験設備では実際に中に入った。減圧状態をつくる排気設備に相当する百㍍の巨大なトンネルや厚く張り巡らした防音材などを間近に見た。

「今は事業団の研究員、職員二十四人、メーカーから約三十人が常駐している。これが実験のステップによって七、八十人に膨らむ」と江口主査。

一昨年五月、H2ロケット開発のため、第一段エンジンLE7の燃焼試験中、供給系総合試験設備試験棟で爆発があり、民家五棟のガラスが割れた。

この事故を契機に土手を増築、植木を行い、場所によっては三十㍍の水が上に噴き出るウオーターカーテンなどの設備をした。

「住民対策は最も神経をつかうところ。幸い、角田市は〝明日の宇宙を開くまち〟をスローガンに掲げ、宇宙に対する理解は深い。地元の要望を受け入れ、来年二月十日、東北では最初に、毛利宇宙飛行士の講演会を角田で開催する予定です」

三日後の二月十三日、毛利さんの講演会が帯広で開かれるが、東北の宇宙の拠点・角田でも宇宙への関心が高まっているのが分かる。

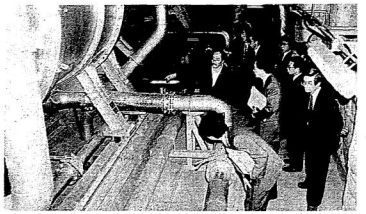
「十勝は広さで優位」

視察団の一人、十勝支庁地方部振興課企画室の白幡博久主事は「やはり、宇宙関係の試験をするにはこれくらいの面積が必要なのでしょう。HOPEなどの開発が進むと、広さでは上回る十勝の優位性が発揮できる場面がくるのでは」と再認識していた。

また、視察団団長を務めた豊田国昭・道工大教授は「七年前、松本正・道工大学長から宇宙基地の話を聞いたとき、夢物語かと思った。しかし、視察をして夢が現実に近づいている気がする。道内の産学官の連携、盛り上がりが必要だ」と振り返った。（おわり）

（小野寺　裕記者）

人工衛星、ロケットの展示物を見学する視察団



30㌔上空の環境を模擬し、第2段エンジンの試験を行う高空燃焼試験設備内を見学する視察団の一行。

…〈メモ〉…

宇宙開発事業団角田ロケット開発センター　昭和五十三年、設置された角田ロケット開発室の機構を拡充し、五十五年、事業所として発足した。ロケット推進系開発の重要な役割を果たしている。